

2010年度に、全国の児童相談所へ寄せられた児童虐待の相談件数が、初めて5万件を超え、過去最多となりました（7月20日、厚生労働省発表）。1990年度の集計開始から20年連続で増加を続け、厚生労働省は「疑いがある場合は児童相談所に連絡しよう」という意識が高まったためではないか」と分析をしています。

4月から関わり始めた仕事の中で、子育てに悩む家庭のあまりの多さに驚いています。不景気の中、生活の糧を得るために長時間家を空ける共働きの親、仕事の不安定な母子・父子家庭、仕事すら無い家庭、子育てにパートナーの協力が得られない家庭、そんな中にいる子どもたちを支援するために、関係機関で続けられる話し合いの数々。

自分自身、子育ての真つ最中を振り返ってみると、眠い目をこすりながら夜中にミルクをあげたり、こぼした食べ物を片付けたり、ウンチやおしっこで汚れたおしめを洗ったり、そんなことが今となっては懐かしく思われます。その時の自分には、少しだけ「余裕」があったように思います。

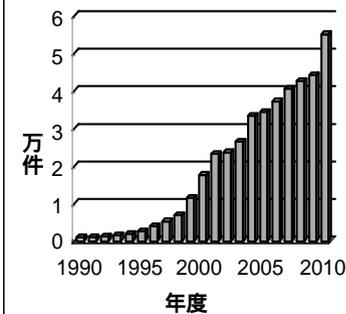
あれもしなくては、これもしなくてはと完璧を求める親の話をよく聞きます。24時間「しなくて

ほんの少しの「余裕」

は「に追われ、今、この時期に必要な親子のふれあいができず時間が過ぎていく。また、完璧を求めるが故にわが子にも「いい子」を求め、「こうでなくては」といら立ち、つい手が出てしまう。これが虐待につながる一つの要因ではないでしょうか。

少し前の新聞に「『ま、いつか』と力を抜いて子育てをしてみては」という記事がありました。「『いい加減』を自分に許すことからはじめ、力を抜いて少々手を抜いても、幸せな親から幸せな子どもが育つ」と書かれていました。ほんの少しの「余裕」が親にあれば、幸せに育つ子どもたちを少しでも多く見ることができるとは、ないかと考える今日この頃です。

児童相談所に寄せられた虐待相談の件数



お問い合わせは

人権啓発広報委員会

(880・6569) まで